

鶴見女子大学教授 間中富士子著

国文学に攝取された仏教

上代・中古篇

文 一 出 版

著 者 略 歴

間中 富士子（まなか ふじこ）

大正2年8月 茨城県生

日本女子大学国文学部・東洋大学文学部国文学科卒。

比叡山専修院に於て天台教学を聴講。

鶴見女子大学教授。

著書 慈鎮和尚の研究——人及び作品・千載集 釈教歌の評釈
新古今集

中世文学会・全国大学国語国文学会・仏教文学研究会々員

昭和47年11月24日比叡山延暦寺に於て受戒・法号慈寂。

省 検

略 印

国文学に摂取された仏教

定 価 2,800 円

©昭和47年12月20日 初 版 印 刷

昭和47年12月25日 初版第1刷発行

著 者 間 中 富 士 子

東京都千代田区西神田1-1-4

発 行 者 文一出版株式会社

代表者 武田 新吉

東京都港区芝3-5-16

印 刷 者 (株) ひ ろ せ 印 刷

代表者 広瀬 由造

東京都千代田区西神田1-1-4

発 行 所 文一出版株式会社

電話 東京 (291) 8049

振替口座東京42149

組版・ひろせ印刷 製本・浦野 3091-0555-7354

(国文学と仏教)

緒言

国文学史の上で取扱はれてゐる作品、即ち我が国の古典文学の作品の中には幾多の仏教思想が摂取されてゐることは周知の事実である。しかしその研究に至っては、既に種々の方面から研究されてはゐるが、何れも断片的であり、又一部に多少系統立った研究もあるが、それも亦部分的である事を免がれない。私は国文学史の線に沿って、純文学作品の中からその摂取された仏教思想や、時代による様相の相違に就て研究したいと多年念願して来た。而してかうした研究こそ純正な仏教文学研究への第一歩であると信じてゐる。

仏教文学の定義を下すことは非常に難しい。何処迄が仏教で何処迄が文学であるか、その接点を設けることが難しいのである。換言すれば範疇の問題である。範疇を拡大してゆけば法語の類、祖師や高僧知識の御文章や唱導文学・教団文学の類も含めて仏教文学と称し得るであらう。現在所謂仏教文学と称されてゐるのは此の類のやうである。一応広義の仏教文学と称して然るべきものであらう。更に範疇を拡大するならば、多少なりとも文学的表現を持つと考へられる『法華経』やその他の經典類、或は『ジャータカ』の如きものも仏教文学と称し得ることにならうし、又実際に一部にはさう称してゐる人々もある。したがって従来仏教文学に対する定義は各人各様であつて、現在も仏教文学を研究してゐる人々の取材の範囲や研究の分野はそれぞれに異つてゐる。私自身も今此処で仏教文学の定義を下すことは出来ないし、又早急に下したくはないのである。私自身の立場としては、研究の範囲を国文学史上の純文学作品に限定して（漢文・漢詩を含む）その中で能う限り最大限度に仏教と文学の相関々係を辿り乍ら、文学作品が如何に仏教を摂取して来たかと言ふ点を観て来た心算である。

大体に於て時代順に観て来たが、かうした研究の方法を——即ち範圍を純文学作品に限定すると言ふ方法を——或は狹義に於ける仏教文学の研究と称してよいのかも知れないが、仏教文学の定義に就いては、更に研究を進めた上での結論にしたいと考へてゐる。

学問の研究と言ふものは、先人の研究を調査整理して、その基礎の上に築かれてゆく場合が多い。何人も意識的に、或は無意識的に先人諸学の恩恵を蒙つてゐるに違ひないのである。そして私自身も亦それに違ひないのであるが、併し私は此處に何の先入觀念も持たずに、私なりに直接に此の研究に取り組んでみたつもりなのである。

国文学史の線に沿ふと言つても、国文学史上の全作品に当つたわけではなく、その時代の代表的作品乃至は特に仏教思想を多分に摂取してゐると思はれる作品を重点的に取上げた。仏教思想を濃厚に摂取してゐるのは中世の作品であるが、時代順に観て来て、奈良朝時代から入って、平安朝時代の末期（八代集の釈教歌に於ては鎌倉初期も含めた。）までを上代・中古篇として一応纏めてみたのが本書である。

部分的には、学会誌、紀要その他に発表済みのものもあるが、これらを含め系統的に上代・中古の国文学に摂取された仏教思想を概観したつもりである。

しかし何分仏教方面の専門知識は未だしいので、或は伝統的宗学の立場から見れば、批判さるべき箇所もあるかも知れぬが、それは今後更に研究を進めて行きたいと思つてゐる。

昭和四十七年十一月三日

間中富士子 誌す

凡 例

- 一 本書に使用した『万葉集』は岩波古典文学大系所載本に拠った。
- 一 仏足石歌は楷写に拠る。
- 一 『懷風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』『本朝麗藻』は群書類従所載本に拠り、新訂増補国史大系所載本及び校国文大系所載本を参照した。
- 一 『本朝文粹』『本朝統文粹』は新訂増補国史大系所載本に拠り、校国文大系所載本及び柿村重松著『本朝文粹註釈』を参照した。
- 一 『和漢朗詠集』は尊円親王真跡本の天保六年覆刻本に拠る。
- 一 『長秋詠藻』は岩波古典文学大系所載本に拠った。
- 一 『散木奇歌集』は群書類従所載本に拠る。
- 一 『源氏物語』は校国文大系所載本に拠った。
- 一 第七章一に於て引用した「源氏表白」は『湖月抄』所載に拠り、『河海抄』『明星抄』『弄花抄』『源氏一品経』等は国語国文学研究史大成の『源氏物語上』所載本に拠った。
- 一 八代集は『八代集抄』本に拠った。
- 一 八代集以外の勅撰和歌集は、書陵部蔵吉田兼右旧蔵本二十一代集に拠る。
- 一 八代集に於ては『千載集』と『新古今集』は鎌倉初期の成立ではあるが、八代集として纏めて取扱はれて居り、釈教歌の発展推移の跡を見る為に、又思想的連繋の上からも特に中古篇に入れた。
- 一 釈教歌の引用に当って、作者が平安朝時代の人物であれば、鎌倉時代以降の十三代集に撰入されてゐる作品も取り上げた。又極めて少数ではあるが中古より中世に跨越する人物の作品を取り上げた箇所もある。

- 一 『三宝絵詞』は東寺観智院本に拠り、『三宝絵略注』を参照した。
- 一 『栄華物語』は国史大系所載本に拠った。
- 一 『法華経』『阿弥陀経』『観無量寿経』『摩訶止観』等、其の他の經典・儀軌・論・讃・偈等は極く一部を除いて総べて大正大藏経に拠った。
- 一 人物の略伝に就ては、『公卿補任』『尊卑分脈』『元亨釈書』『日本高僧伝要文抄』『天台宗年表』『日本歴史大辞典』『大人名事典』等を参照した。
- 一 以上掲示した以外に参照した諸書は、書名・著者共にそれぞれの箇所に於て注記した。
- 一 難解と思はれる、或は耳馴れぬ仏教語は、本文中に於て、又は各章の終りに注解を施した。

目次

第一章 万葉集及び仏足石歌に現はれた仏教思想	一
一 仏教伝来	一
二 懷風藻に於ける僧侶の詩	五
三 無常を詠じた初期の作品	一〇
四 仏教の影響を受けた第三期作品	一二
五 第四期の哀傷歌	一六
六 仏前唱歌	一九
七 仏足石歌	二三
第二章 平安朝前期の漢詩集に現はれた仏教思想	三四
一 平安朝前期の漢文学と仏教	三四
(1) 平安朝前期の漢文学概観	三四
(2) 平安朝前期の仏教	三六
二 凌雲集	四〇
三 文華秀麗集	四四
四 経国集	五一

五	本朝麗藻	六四
---	------	----

第三章	法華八講の和歌と勸学会	七三
-----	-------------	----

付 法華三十講・五十講の和歌

一	法華八講の起原	七三
二	宸筆御八講	八〇
三	八講の捧物と和歌	八二
四	詠法華經歌	八六
五	法華經に関する和歌序・願文・賦・詩序の類	九三
六	勸学会	一〇一
七	勸学会の和歌・賦・詩・詩序・知識文	一〇九
	付 法華三十講・五十講の和歌	一八

第四章	弥陀讚美・浄土欣求の和歌	一二六
-----	--------------	-----

一	比叡山の念仏	一二七
(1)	常行三昧堂の念仏	一二七
(2)	往生要集と慧心僧都	一三〇
(3)	観想念仏	一三一
(4)	十楽歌	一三五
(5)	来迎及び九品往生	一四〇

二 浄土三部経を詠める和歌……………一四三

(1) 阿弥陀経……………一四三 (3) 観無量寿経……………一四五

(2) 無量寿経……………一四四

三 浄土関係の論・十二光仏・六時讃・往生講式・弥陀小呪等を詠める和歌……………一四六

(1) 論その他……………一四六 (4) 往生講式の歌……………一五一

(2) 六時讃歌……………一四七 (5) 冠句弥陀小呪歌……………一五三

(3) 十二光仏歌……………一四九

四 散太奇歌集の浄土讃歌……………一五四

五 長秋詠藻の六時讃歌……………一五九

六 観想といふこと……………一六七

(1) 摩訶止観の観想……………一六七 (3) 月輪観……………一七三

(2) 観無量寿経の日想観と水想観……………一六九 (4) 密教の観想……………一七四

第五章 和漢朗詠集の仏事の詩と釈教歌……………一七六

一 仏事所載の詩と作者……………一七八

二 仏事所載の摘句十三首……………一八三

(1) 摩訶止観……………一八三 (8) 暮春勸学会賦法華経詩序……………一八〇

(2)・(3) 白氏文集……………一八三 (9) 九條右丞相花亭法華会詩序……………一八一

(4)	極樂寺建立願文……………	一八五	(10)	贈阿難尊者詩……………	一九三
(5)	西方極樂讚……………	一八六	(11)	弘誓深如海詩……………	一九三
(6)	五時講願文……………	一八七	(12)・(13)	採果汲水詩……………	一九三・一九四
(7)	暮秋勸学会賦法華經詩序……………	一九九			
三	和歌四首……………	一九四			
(14)	九條左丞相(右丞相)……………	一九四	(16)	空也上人(仙慶法師)……………	一九五
(15)	伝教大師……………	一九五	(17)	村上天皇……………	一九六
四	平安中期の作品に見る法華弥陀両信仰の融合……………	一九七			
五	仏事の詩と釈教歌……………	二〇一			
第六章	釈教歌を背景とせる藤原俊成と源俊賴……………	二〇七			
一	千載集の序文にみる俊成の態度……………	二〇七			
二	長秋詠藻の釈教歌……………	二〇九			
三	法華經歌の盛行……………	二一一			
四	往生要集の弥陀讚美・浄土欣求……………	二一四			
五	散木奇歌集の釈教歌……………	二一五			
六	俊成の歌論・判詞に於ける仏教思想……………	二二一			
七	俊成と俊賴……………	二二七			

八	釈教の部立……………	三三〇
---	------------	-----

第七章	源氏物語と天台仏教……………	三三五
-----	----------------	-----

一	中世古注釈の諸説……………	三三五
---	---------------	-----

二	源氏物語に現はれた生活体験としての天台仏教……………	三四五
---	----------------------------	-----

(1)	三大部の講読……………	二六六
-----	-------------	-----

(2)	山（比叡山）……………	二七三
-----	-------------	-----

(3)	法華経受持……………	二八八
-----	------------	-----

(4)	法華八講……………	二六二
-----	-----------	-----

三	紫式部と天台仏教……………	二九三
---	---------------	-----

第八章	八代集の釈教歌……………	二九九
-----	--------------	-----

一	古今集より後拾遺集まで……………	三〇三
---	------------------	-----

二	金葉集・詞花集……………	三一三
---	--------------	-----

三	千載集・新古今集……………	三七七
---	---------------	-----

結	び……………	三六六
---	--------	-----

索	引……………	三八八
---	--------	-----

	付
	録
(1)	(1)
(2)	・
(3)	葩及び散華解説
	法華八講の次第

卷頭図版目録

- (1) 伝嵯峨天皇宸翰哭澄上人詩（青蓮院藏・第二章四六頁参照）
- (2) 伝教大師像（伝小野篁画・延暦寺藏・第二章三七―三八頁・第三章八八頁・第五章一九五頁・第八章三二二頁参照）
- (3) 伝教大師御廟と沙羅樹（比叡山浄土院）
- (3) 比叡山常行堂（左・第四章一七八頁参照）と法華堂（右・第七章二五三頁参照）
- (4) 於藤原道長第法華三十講歌合（陽明文庫藏・第三章付一一八頁参照）
- (5) 慧心僧都像（大津市聖衆來迎寺藏・第四章一三〇―一三一頁・第七章二八九頁参照）
- (6) 慧心堂（比叡山横川）
- (6) 慧心僧都墓（比叡山横川）
- (7) 葩はなびら（久邇倪子尊儀七回御忌声明例時散華・第七章二四八頁及び付録②参照）
- (7) 法華八講散華（第七章二四八頁及び付録②参照）
- (8) 当麻寺蓮糸大曼荼羅（極樂曼荼羅・当麻寺藏・第七章二七二頁参照）

挿絵目録

光明皇后御願経華手経（陽明文庫蔵）	三
仏足石碑（粟師寺境内）	二四
嵯峨天皇宸翰光定戒牒（国宝・延暦寺蔵）	四七
法華十講図（延暦寺蔵）	七九
御堂関白記（国宝・陽明文庫蔵）	七九
金銀法華写経・譬喻品（延暦寺蔵）	一四
平家納経般若王品（国宝・般若神社蔵）	一三
鳳凰堂（宇治平等院）	一五
阿弥陀如来像（国宝・同右）	一五
聖衆来迎図（高野山順次八幡講蔵）	一五
比叡山根本中堂	二五
扇（国宝・伝安徳天皇御物・般若神社蔵）	二五
比叡山根本中堂内陣不滅の法灯	二五
法華曼荼羅（神戸太山寺蔵）	二六
弥陀三尊像（国宝・三千院蔵）	二七
普賢延命菩薩像（延暦寺蔵）	二七
不動明王像（重文・大津市大林院蔵）	二七
比叡山黒谷青竜寺	二九
比叡山横川大師堂	二九

第一章 萬葉集及び仏足石歌に現れた仏教語・仏教思想

一 仏教伝来

印度に起つた仏教が支那大陸・朝鮮半島を経て我国に将来されたのは、記録に残るところでは欽明天皇十三年（五五二）壬申であつた。

『日本書紀』（卷第十九天国排開広庭天皇）に

冬十月、百濟ノ聖明王（更名聖王）遣西部姫氏達率怒喇斯致契等一、献釈迦ノ仏ノ金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷一、

とあつて、始めて百濟から仏像・經論・幡蓋等が将来された。而して此の時、別に仏徳を讃へた文が添へられてあつた。

別ニ表シテ流ニ通礼拜功德一云ク、是ノ法ハ於諸ノ法ノ中ニ最モ為ニ殊ニ勝レテ、難ク解難ク入リ、周公孔子モ尚不レ能ハ知ルコト、此ノ法能生ニ無量無レ辺福徳果報一、乃至成ニ弁無上菩提一、譬ヘハ下シ人ノ懷ニ随レテ意ニ宝ニ、逐レテ所ニ須レ用ニ尽ニ依レ情ノ、此妙法ノ宝モ亦復然ナリ、祈願依レ情無レ所乏キ、且夫遠自ニ天竺ニ、爰泊ニ三ノ韓ニ、依レ教奉持、無レ不ニ尊ビ敬一、由是ニ百濟ノ王臣明謹遣ニ陪臣怒喇斯致契一、奉レ伝ニ帝ノ国ニ、流ニ通ニ畿内一、果ニサリ

仏（のたまふ）所記我法（ガハ）東（ト）流（フ）

（佐伯有義校訂標注六国史所載本に拠る。但し辻善之助著『日本仏教史』（第一巻第一章第一節）に、此の上表文は偽作であり、恐らく推古天皇以後に追作したものが竄入したものであらうと。更に仏教渡来は欽明天皇七年戊午であるとし、元興寺縁起資財帳に依つて考証して居る。）

その後敏達天皇八年（五七九）に新羅も使を遣して進調と共に仏像を献じた。（日本書紀卷第廿淳中倉太珠敷天皇）崇峻天皇元年（五八八）には百濟から使者と共に僧惠摠・令斤・惠寔等を遣して仏舍利を献じた。百濟は再度進調並びに仏舍利及び寺工・鍤盤博士・瓦博士・図工等を送つて来た。此の年飛鳥の衣縫（きぬぬい）の造祖の家を壊ちて法興寺を造つた。此処を飛鳥真神原と称した。（日本書紀卷廿一泊瀬部天皇）推古天皇元年（五九三）には、法興寺の柱礎の中に仏舍利を安じた。同三年（五九五）高麗僧慧慈が帰化し聖德太子（敏達二年〓五七三）が之を師として仏教を学ばれた。同年百濟僧慧聰も来朝し、慧慈と共に仏教を弘演したが、同四年此の二僧をして法興寺に住せしめた。同十二年（六〇四）聖德太子は憲法十七条を制定されて国是の中に仏教を採り入れられ、第二条に「篤敬三宝」と仰せられた。十四年夏四月（六〇六）には銅鑪の丈六の仏像を造り、元興寺の金堂に安置し、齋会を設けたが、これより毎年寺毎に四月八日、七月十五日には齋会を設けしめた。更に同年秋七月、聖德太子は推古天皇の御請によつて『勝鬘經』を三日に亘つて講説申し上げた。更に又『法華經』を岡本宮に於て講説され、天皇には大いに喜ばれ播磨国の水田百町を太子に施られたが、太子は之を斑鳩寺に施入された。（日本書紀卷第廿二豊御食炊屋姫天皇）かくして我国文化の黎明期に於て、仏教は早くも深い根を下しつゝ、その文化の発達を助成したのであつたが、爾来彼我の交通は益々開けて、大陸文化が将来されると共に、仏像・経論・僧侶等も渡来するやうになり、聖武天皇（大宝元年〓七〇一）天（平勝宝八年〓七五六）が立たれ、法の花の咲匂ふ我が上代に於ける仏教の黄金時代を現出した。